がんは「治る病気」の時代に

がん社会を診る

中川 恵一

大変残念ではありますが、がんと診断されると、1年以内の自殺率が20倍以上になるというデータがあります。

また、がんと診断された会社員の約3分の1が離職し、自営業者では17%が廃業したという調査結果もあります。

別の調査でも、がんと診断されると約2割の人が仕事を辞めていました。さらに問題なのは辞めたタイミングです。仕事を辞めた人のうち、32%は診断が確定した時点で、9%が診断から最初の治療までの間に離職していました。つまり、4割以上が、実際に治療を受ける前に辞めてしまっているのです。

まだまだ、「がんは不治の病」というイメージがあるせいでしょうか。日本人男性のがんで一番多い前立腺がんでは、進行したステージ3であっても、東大病院の場合、5回の通院で治療が終了します。照射時間は2分程度。「放射線で焼く」という言葉もありますが、温度の上昇は5百分の1度余り。副作用も少なく、仕事を辞める必要など全くありません。

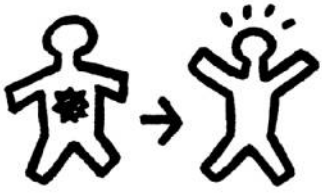

イラスト　中村　久美

そもそも、09年に国内で診断された前立腺がんの10年生存率は、ステージ1、2はもちろん、ステージ3でも100%。不治の病どころか、「治る病気」になったのです。

今、日本の成人のがんで一番多いのは、大腸がんで、胃がん、肺がん、乳がん、前立腺がんと続きます。

日本人のがんの代表は長い間、胃がんでした。しかし、食物の衛生管理が進み、胃がんの原因の98%を占めるピロリ菌の感染が激減。胃がんも大きく減っています。逆に、肥満、糖尿病、運動不足などがリスクとなる大腸がんは増えています。感染型の胃がんから欧米型の大腸がんにトップが交代したわけです。

成人のがん全体の5年生存率は約7割、10年生存率も約6割となっています。

子供のがんも治る時代になっています。国立がん研究センターは昨年末、14歳以下の小児がんを対象とした5年生存率を初めて発表しました。

小児がんでは、できやすいがんの種類が成人とは全く異なります。小児に最も多いのは、38%を占める白血病で、脳腫瘍（16%）、悪性リンパ腫（9%）、胚細胞腫瘍・性腺腫瘍（8%）、神経芽腫（7%）と続きます。

13～14年に診断された小児がん患者の5年生存率は、リンパ腫91%、白血病88%、脳腫瘍75%でした。11種全てのがんについて7～9割台で、大人のがんの生存率を上回っていました。

すべてではありませんが、がんは大人でも子供でも、早く見つけて適切な治療を受ければ「治る病気」になったといえます。このことはもっと知られてよいと思います

（東京大学特任教授）